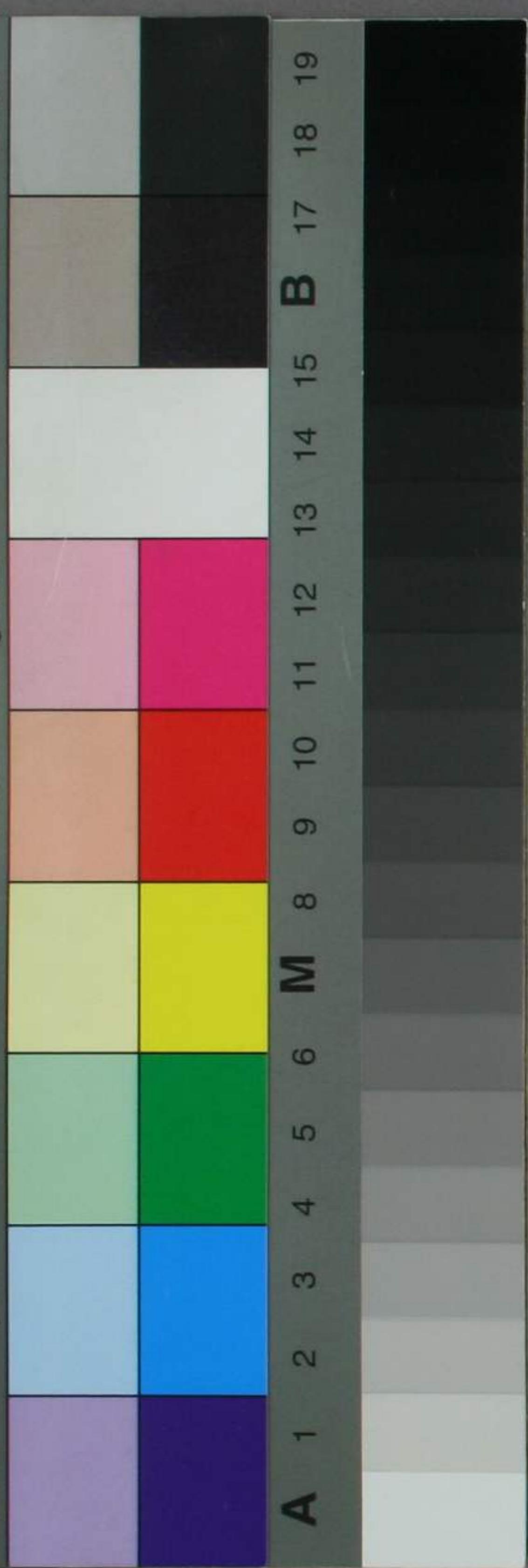


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN Taimia



1280
10

三七 全傳
巖二編 右夢南柯後記卷之二

東都

曲亭馬琴編次

前件集二

ふわと ちやね
冬画の晚稿

苦一死へ。やじきるまうの立あたて。寝るとひまく夜の夢もまうみ
まうみこと。形みたおとうち歎く。全みが母刀自へ。やうやくに药を起を取。
子へかのくち。勧を扶て。母によりうる夢と見て。づく驚きゆふ。翁は
何とぞらう。と問慰をばうち戻は貪れず。吾体の病著。毎月にまく
負債と。勸解つひも返されど。本音つづく。ちぢや。たまく日睡む
夢か。小討債鬼よ債らす。かんえい生くまづ帰ふ。守町の四五六
ぬ。例の乞きをまごめりて。吾債のまんたうと。討債鬼と詐欺
て。鄉と昇りて。まきを。まへせぬのと。帰くせど。胸苦しくて。声へ漏る。

立身嘯と喚が声の現みてあつたる。是へ正しく心が魂のをやむる
みそあんじんせよ在ひもゐた人の貞は翼すり入もせば。ちん身が肩も
体也。願へ西方彌陀如来迎えさせてゆく。どうらまみくも霜小傷む。
棺の巻禁うた口説。要物うそを全みへゆもあびうち笑ひ。いふにと宣ふ。
爰より祝へ人より。あれども。要は法りのへ見て後人の食應をあらわり。
と世あへひりて傳へ。あれと山くさが母の病ひあつて栗りへめでたし。爰
ふ侍りめり。うや牙ふ條す。負債あつとも。天道の人を教ふ。どう誠よ稱ひうべ。
神も守す。仏も護す。發跡時うづやへ延まく日よ延まん。どうば負債も葉
きく。只緩やに保難して。花まく春ふあひり。極乐淨土へ住むとも。アソク
すゆるのものうければ。つそぞ赴く旅すと。疎毛が因を拭ひ。現ゆ吾佛の
眉発うし世を捨ねば。せよ捨れて。賣苦よ浮堪せ死と急ぐ。放と
うへまくへてゆひと。耳掲もせぬ絳五百。舍利のすうすう茶入外。横九
丈の薪の價借んと。友どう許ゆたれが數の物こそらと及づ。孫
やぶまれとてゆひと。耳掲もせぬ絳五百。舍利のすうすう茶入外。横九
丈もなくと。是がたあんべ十日あまくへ腹鼓うつて過ぐ。これとすと
ひうけて。被の隅引ひだ。母のほどうへ寄せられ。それへこゝまで。僕伴す。
浪速の浦より潮のかたへ浮世の人を。然るをかくまで信ふ。友ら。抑
何人みて候。四五六の秋暮。伊市おと間く手よ埋する。五箇の歳
計一。下ふ布る紙牌を。さんかくへて肩を顰め。施引を。育婚五百錢。
白木文殊。大和國縁井の家臣赤根半之。延暦松曾太郎と寫せん。

四庫全書

あらう得ど。全のみもん身へこの革を。よく識る。とくとく。物と間まてそれへ。
とむろりに。回答をすつゝれから。小裏めどりく法施事。乞乞々せドと
うちも騒がど。つみ赤根とよん蟻松とよん。アリタツメ。候ぬま。被乃
破透する。漏る。あく。届よとて。友ざらうどして。反故さればその海を。もくま
すのいひど。といひうむと。バジを掉。つあく。それ。偽あらん。裏裏小門遠を。見
等。が。りのがさつゆくと。院。おけ。ハ千日墓。お施。り。あうて。物夥。お多す。施主。ハ
サモト。つわけ。太和の続井家。みて。第一の執柄。すうとぞ。今。のせよ。と稀。る。太檀那。小
さ。る。どつひ。を。さひ。あ。られ。ば。こ。と。へ。施。り。の。承。う。ご。と。日。開。の。煙。と。そ。う。様。で。
を。食。を。も。在。よ。が。ひ。る。母。が。病。著。ゆ。ゑ。る。べ。え。や。と。て。叱。う。に。あ。う。ね。ど。
す。ど。サンド。う。ミヤ。臥房の障子紙。破。と。て。隔。す。た。親。き。す。ふ。う。う。ぞ。や。う。り。あ。り。て。如。此。く
あり。と。ひ。あ。じ。て。へ。ゆ。つ。ね。首。へ。か。せ。と。尾。を。隠。ま。ば。施。り。の。牌。の一。字。一。文
の。統。ね。せ。と。み。ふ。生。育。し。へ。食。う。れ。あ。と。つ。ひ。あ。ぐ。ら。奉。是。親。の。失。也。幼。稚。と。れ。九
つ。と。ひ。ま。病。あ。ら。ち。き。せ。う。ば。と。病。の。隨。み。育。ん。と。ら。す。て。教。の。道。を。教。き。革
あ。ら。も。ぐ。も。あ。ら。ぬ。す。で。よ。す。と。と。捨。て。も。親。よ。似。ど。自。我。と。よ。う。づ。よ。賢。く。て。
孝。敬。か。と。も。な。ら。る。斯。ら。ん。う。よ。手。習。一。物。統。す。ま。る。る。も。あ。く。べ。せ。ふ。も。人。す。も
用。ひ。と。身。を。立。す。と。も。あ。く。と。の。死。今。更。よ。悔。て。か。と。廢。年。月。と。倭。る
の。と。す。ば。と。か。れ。は。親。母。の。懷。を。全。み。ハ。身。よ。も。先。て。づ。と。面。同。り。う。け。り。且。て
母。駄。へ。や。く。小。臥。房。を。生。て。全。み。が。あ。く。推。り。上。坐。よ。推。居。ま。べ。全。身。く
そ。が。て。恭。く。膝。よ。や。か。よ。涙。と。涙。襤。襤。の。中。よ。娘。ひ。う。て。氏。も。姓。も。告
す。ま。ど。吾。情。と。實。の。母。と。お。わ。せ。待。ハ。せ。す。も。又。罪。と。深。き。と。あ。れ。と
ひ。が。れ。筋。あ。よ。り。ま。で。も。告。び。しう。施。り。の。二。字。を。諸。の。解。と。

施主と誰ともあらずて。親あれ匂そ袖乞の墓より物を戴き捧て取る
色ゑりて來り。口うのを哀痛する。言あつてかひく。あく怪え
きべくも。吾脩ハ冥の母ふあらぞ。乳母晚稻と呼きて。お寺が命公
太和半國。伊賀半國と端ちめり。続井殿の普代の家隸。今市全八郎と
ひく。尚壯の年。りしづきと酒とよ身をりら崩して。武士の行ひざま
う。あらに當主伊実久殿。吉稚凡と名す。京師と移り。あら
供え今市赤根布施の三人でけり。吉稚弱少るをかく。全八郎へ同九
求る。布施蝶九郎と相譚て。主居と淫酒。債を進させ。剝主の要金と
横領をほし。事終て發覺て。布施りうともに禁獄せし。苛く金を助けて。
大和と追放せられ。と改めるのを往かもあらず。徑經て。あら全八郎へ
赤根をも者さて馬を牽轎と昇る。浮雲ふとみづばれて。よろいぬ而乃
耻をも者を。彼蝶九郎りう共よ浪速じうふうされ。故朋輩ある赤根
生の黄金と奪ひ。その妻と奪ひ。きんとせ。役ふ。忽地赤根ふ追迫ら。と
時へ享禄元年。季冬六日の夜。河風寒た霜の夜。水の反よ辟方を。
赤根が為よせ。去り。あら。あら。あら。あら。あら。あら。あら。あら。あら。
あひ合橋の下。やく水のうち。と。これを見。爺公のう。あれ。又母の前へ全八郎と。結び
定め。妻みへと。あら。あら。あら。あら。あら。あら。あら。あら。あら。あら。
増穂と。あら。あら。幼稚より歌舞音曲と。笠屋夏と習ひて。その伎を
あら。舞踏の異名を。小夏と呼ぶ。近夏小伴として。貴人の酒宴の席へ
あら。あら。あら。あら。あら。過世の惡縁を。りん。吉稚丸の旅館ある。
舞踏の袖あら。樂屋を。あら。全八郎よ蕩ける。



霧の情と結ぶ夢よ。僅兩夕の假枕
 ちて、忽地有身づ。づその物となりし
 もへど、郎へ更ふ主とも名告ぐるに。テ
 てぬの冷ふをやて。その後へ又ゆつて、
 又三霧よ舞くんとて。犯す科みゆへ
 あひび。遺る像見へ次の春夏と増
 穗の名ゆかし。本黒の薦つとせりて。
 うもをすまふ男見れど。恥ほしく。
 せすまふとごきるのあくねど。同樹どのへ
 態えふそつと腹すこすれ性ふとせば。
 ひとくみじよ罵りまよと。母前へ面み
 と心痛。て乳も出ぞ。祖母。おののき
 まく。同樹どのふいひ。ト。乳母。と
 嬰児。と娘育せんと。啖え。くぶ。あよた
 吾傭。の刀屋へ。がん家の乳母。おまく
 そ。がて母の前へ。牙と憂え。わたりひ
 そそぐて。産後。とよく。肥。と。うち。あらむ。
 そひ。の秋八月。契。し。月。も。タ。ぐ。と
 みそ。冥土の旅。よ卦。す。と。み。よ。う。だ。折
 み。よ。ほ。た。と。の。うち。も。続。く。物。ぐ。く。
 僕。よ。間。一。年。あ。と。お。か。三。方。の。秋。の
 比。同。樹。い。の。続。井。家。と。う。周。流。士

風流女とく号られ。陰陽二口の大刀と研て進せよと仰やれ。あり
久家職の面圓こ下すとて。穢て大和(おおわ)を。件の大刀と研めよ。惱て風
流士の刃といへて毀す。久く御くさる科されば禁樹せよ。久の條乃
る承し。続井の執權蝶松ど。聊由縁ありて殿の久憤とまじ寛
め。苛に沙汰よ及とね。同樹どりの悪と。華落(けり)ありよけよ。久の
ます活業せば後の崇もを経。又幸すて崇あると。此度の久と世よ
あれ。京家の武士よ誰う亦。刀と研もうりのあぐら。久の初の日。照
りの久。化如と活業どりてあは。と尋思。奴婢(ぬび)の暇をとどく。
職と止宅を捨遠(なげ)。華落と去て。筑紫の方へ。久の母を弟
の祖母(のまご)の瀟然とうち泣つ。さて吾傭(のまご)宣ひ。汝が志とく。久の
子の増穂と喪ひ。哀との袖(そで)と。乾(か)ぬよ。久家の難ゆ。今この
孫(のこ)とくせん。住馴(すみなれ)する京あよ在(ゐ)ず。同樹どりと娘(むすめ)く罵(のの)り。虚(うつ)す力のと。
往方定めぬ。旅の空へ。これとも伴ひ。途(と)て餓死(うゑしき)るや。あん。傷(きず)と
そむく人あまされ。こまか父(ちち)へ。今帝(だい)全ハと。喰(く)する。続井の家縁(いえねん)。
流浪の後(のち)。往方をもくねど。名告(めし)ひ。親(おやこ)と。むどうりと。物
もぐ。今熱(ぬく)まくらか。乳(ちゆう)もたれ。祖母(おやぢ)と伴ひ。唇(くちびる)も。久の
看(み)死(うゑしき)る。世の憐(あわれ)み人(ひと)と。かくべ。却(がく)孫(のこ)が。幸(さい)ひ。と。もくら
火急(ひきゆく)。馬(うま)と。遣(おと)す。方(ほう)も。情(じよう)が。かる。折(たた)む。身(み)を。海(うみ)が。手(て)とも。よんて。故郷(ふるさと)へ。おて
也(よ)て。養育(いくよ)て。よ。と。罪(つみ)あむ。と。うづら。女(めのこ)児(こ)が。爲(あつ)る。孫(のこ)と。みふす
う。隠(か)れて。年(とし)と。竊(とく)よ。か。むく。銀(ぎん)六石(ろくせき)あまう。あり。わざのう。賄(あぶら)ひよ。
物(もの)も。ぐく。もあ。ねど。千(せん)せうと。程(ほど)孫(のこ)が。爲(あつ)る。松(まつ)の葉(は)が。爲(あつ)る。志(し)すと。もふて
こりて。ゆた。叮(のぞ)寧(ねむり)。憑(のぞ)ま。まゆひ。最(さい)上の川(かわ)よ。あ。ね。あ。き。とい。れぬ

稻舟乃綱手を失ふ主の零落おゆびの涙の水すゝみを歎歎乎小善悪ぞ
ど立易うれとさけ引つ。東も西もさゞづくね。和君と處てあくののみ浪速海へ
むけ居て絶て故主の在所をもとむ。元本吾備よ夫ゆ。よまく三年一ゑ。
強縛の中よ元てせよる楫えやうとくねば吾備へ京の刀屋へ乳母よあれ
三年の後夫婦ひろよ便ぬまで又ふせ奉る幸也。至るへあれど西と
き。この種見をなほ。そぞう賜よ予宝をめ。とおへひき可魯多み。小年
すて銀肩がく。終もろく脾痺みて骨と皮のモ瘦體減矣。某脚よりそ
竭。全三年の医師三昧。刻良人へ時疫みて墓ろくも世をきじふ。彼六面文の
銀青銀も残る。牙室の吾備と種見。やと人の手もへかは。と系綿縛りく
細き世を汚る寡婦が手ひらよ。すくや小人とあせ。和子へ反哺の聲ひ。汝く
やかよせとゆる族の全みとゆまと。京よりの名もあらず。同樹どのく憎
げ。爺はふと名をもつかひ。仰し人の走り。うねば。遠奴。其の後の刃刀
ち。と呼むことよ。常ふ嘵き。ひが。この浪速へねて來て。冥入全八
ど。名の一すと。が良人久四郎の名號をとりて。全みと名へゆ。身の
わひひよ。星よ。など。なん身の愛父も続井の退糧人を。が。被赤根蟻松と肩と
地一。同僚。よ。志。ぬ。の。と。ひ。の。み。だ。ら。そ。の。よ。と。生。三。う。ひ。ゆ。い。親。う。ぬ
朝のよ。あ。ふ。き。眼。の。中。よ。え。ま。く。彼。黨。が。続。り。と。多。く。常。言。よ。ひ。氏。う。育。ち
え。ひ。ち。ん。身。う。失。る。と。ぞ。賤。を。吾。備。よ。字。生。す。不。幸。と。歎。く。ふ。あ。す。う。あ。う。よ。う。よ。う.
わ。ん。身。が。幼。く。ま。た。実。え。よ。遙。う。す。す。き。う。て。木。よ。の。ア。く。ア。よ。の。う。う。け。よ。う
拳。動。然。び。は。と。え。わ。く。と。の。妻。生。と。告。親。の。恩。よ。死。固。で。孤。が。す。往。と。身。
よ。み。今。と。そ。り。て。あ。れ。が。わ。れ。今。う。骨。の。中。よ。頼。と。歟。オ。の。病。著。よ。息。絶。う。經。不
ち。ん。身。の。実。の。歌。を。あ。る。は。の。う。ほ。じ。よ。や。告。ん。望。へ。志。と。せ。ん。と。胸。う。絶。ね。ど。わ。

あく。うちわるせー背がす。こそそ驚きのあ。苦にたひの恩愛の絆よ。と
禁めあくね涙よ胸のつこ庇あのがふ餘る王ゆや。うあづれも全みの姫む
眼裏凄じく。肩搖を落と息を吹き。形うやタゞまでも。冥の親とあよど
仇人の施物をうけりちの神をくぬ身こそ悔しけ。これへ野合の私うども。
足の折ひよくばとそ。復讐の志うく。鳥歎もおありゆん。入の仇する赤根が
黨との地へ寄も集合と。海をび沼が死天の賜。千日墓といまごゆ。者奴ホ
がゆるを埋伏て怨と復むる今霄ふあく。よんとそ浦閑く敗戸棚る。故没買
賣の硝刀。縱双の死くとも。志祝モ健夫が恨の寢又の衣をあひゆ。やの晩はと腰
小碎。さうかとまう經よ晚稻の早見と遙ひつ追びぬよ薄張。か極く晝夜ア
捲う著。やよ和すよ。こうと然めて今刀角うつふとぬ喰え。もと身か罪々全ハ
ぬの赤根の聲とあひて原毛脱且後天罪さんよ。仇人とゆの鳴字あいだや。
加旗祖母さゑは続井家一の老じうり。蟻松典膳駿の前妻と從弟。さうき
とぞ。え由縁ある因樹ゆ。宝刀の刃と鏡。まどは波も石を。りくわらの蟻松
ぬの助よ。曲膳今へ世よ在玉と。も。施物の刺す曾太郎と写せられ。その
子うじ。赤根蟻松へ続井の軌柄。両臣縁と。縁と。を。孫て。同胞よ異をば。
と豫て。穿うるゆの侍り。おとすが祖父母。由縁す。受ける恩ゆ。松の妻黨
赤根を教せられた。て又の恩ゆ。を。あよを。のり。善人を教。悪人と。うりて。幸を
と。が。遂と。す。人を教せ。又教。國の法。友へ。税を。ヒ。親とも名告。と。おと
教せ。全八どんと。年れか。三才の秋。中で。慈愛。生。月。後の後。う。でも。
と。分つ袂。涙と。泣。て。華の溢。を。う。ふ。立。太公。ひ。祖母。さゑの。せ。う
あり。や。さ。が。う。ね。穴。の。筑紫の。硝。尽。れ。う。と。う。ざ。の。索。て。名。告。あ。う。ん。と。う
お。ま。う。や。さ。が。う。れ。か。口。や。あ。よ。冥。の。親。の。枉。死。と。告。て。物。を。も。う。ひ。う。え。を。

古文名言卷二

モヤ。あくわうう。あつみみ。みつと。
えも道世の惡報歟。禍神の身。憑る歎かむるの理。そらの嘆和氣。云
ふとぞ。よく吹きぬれて。とがまり。あく。す。常くとくに口詫。敵く席薦よより。塵埃。
まく。嘸咽。涙。ぞゆき。せのれ。全み。張つ。ひ。ひの檀弓。弛ねど。づる日。と仰て。歎息。
さり。ある。うぐ。り。ま。ちやこ。おと。ち。
昔の主従。今へ歎す。實の母。うのと高た。難育の恩。と。高。且。名。を。ある。と。す。

許すと回答もあり又立あづれしも。老の巻のらすと。わく張つ賣縁
裳を。揮拂ひよひと猛く。まうせんとそれが外面より忙しく來人ありく。
ううど額を打合。こゝ全ぬ然四五六年。ある新ひ病と咳き。袖もう接ても
生びて入口険き門柱。されど闇を昇りよきそ。お頬よ焦燥の。舊の如くゆを
きむ。うそ。四五六七八此彼を。えりうて眉根を下せ。常ふあく全ぬが。額の色の
ゆくうき。ち懷か又何ゆ。病體くる人の。端ちくうち臥て。既ま撫ねか
りどて枕を進よせ。あはのとひ幕を。寝子口説をあうけん。とまが。尋
ね。殊もあふ。うぐいを煎る。と。問慰。と。全ぬ。怪。と。額を拭け。と
つみ。風の吹て。十日あまり。詰。四五六の。あよけ。と。茶。まよぬり。と。て
え。のま。あかみ。と。う。酒。一瓢。買て。と。ひつを。と。撫禁。饑饉の。と。連坐。あら。
和主が酒を喫。うびき。おま。病で。牙ひとう。拂。でも。鬼よ角。櫻。ぬ燈臺却

永樂錢
三貫文
今の金
西餘小
あるが

根園。田舎と競ぶる外より利を得る所あんうと俄頃よりよろづは
ありて聖火大祝起行べ辞別もせまゆく。又去年の春う。夥計の敗没本
が三百よやの手弦構。和主の母の太病あり。この春う半年あまり。藏弦一文
かづりせむ。この月の物主。本進へ後よ賤せんと駿計鬼ふらうとなすて。
永樂錢三貫の主既よ為課。こ豆の私を考へて神仏の懸念を。がく
護らしゆとそば縁の集り果るをよび半晌も疾報報して。飲せんとてある。
物をふく時節をすまねばおも成せば。經慮の功をもさばとす。其
和らしがよくある所。づれどものよりにてゆ。可憐日と算え。彼猪りてみて
とぞせんよ。門戸續て俟ち。誘ひて。と裳ふわて。足だやよき去ぬ。當下
晩霜の陰と擣て。五六と遙よ月送り。全从何よ喫食ひ。經慮の功をもさばと
る。四五六七年件の事とあつて。如此ひひつ教主とざる族があつねども。和主の
高少教訓の真中かて候。かゝる譽れが譽主。彼赤根の続井の
執柄殊よ親族眞を奉て。親の菩提を吊ん爲よ。此比へ外する力のあら
従者も又多かじ。然すか和子の草牙を。志の猛くとも。鷄卵をりく
石よ擲。蠍娘の臂を揚て。轍を駆よ異うべ。アトウタウの反ひあら。

一玉からよどみ。さくふ禁めへせゆ。月をうまく年を積も。と隨小
巻治て。こそ真よ譽とひべけ。吾倚が餘命へ。日もあひ。經慮の功と
あらごとひ。金言と胸よきめて。且くちひひをまつた。よろひをまつた。
ひすで。死ひて。座りて。腰の孫がせんをぐす。熟達よ生産されて。才の
憂き。死ひまえ。又は伏て。死す。南堂阿弥陀仏と念佛。全从が後
がある。刀をもて。五六す。放さんとあひ。全从吐嗟と拂。禁め。かく
物よ狂ひ。す。從今志を遂す。母を死へて。何のせん。かく。此又と納す。

あらばひよすうなへ。それへ又情う。情うとん和子をそ。只この傍よ
殺してえと死を究むる姉母よ。争ひう程て全々へ天うち仰き嘆息し時へ
ぬすび泣ぐけども親の歎みをひきて且く仇人の頬を繞せん。さう易く
おひき。といひつ又を奪ひされば晩稻の胸と拊ひし。それまで安心とう。余て
捨て疎めぬるも。ゆきまみ和子の為されば。こうと人と恨まずひそ。今鳴籠へ
入相。浪速三街。まう巡りて物不くをなす。茶粥を炊てたゞべ
き。とりとてえひす施刑の糸よ。うれしきと恨むをも。雄が祇包うはて。眼と
脣らじ巻と握す。君子の嗟来の食を受す。孔子の盥泉の水を掬はし。物
識人の常あるを。何とも諒解がほし。今こそしあわす。や豫讓
が舊衣へ買ふ。仇人の施物と。やへ受ん。目今復と怨の刀尖。ひきや。と
ひとうじら。又と抜て赤根が名薄と。二とびに二とび刺つぬ。かへと刀よ鑿
残の。猪のそづぶを断離する。祓の隅うそうて。門邊へ撲地と投捨と。
の。門口険と乱と入り。悲田穀計のむらにて。千日墓の施年をうの。世主が
面へ詰り。と次が手属う。張里が脾欵。さもう奴よ物まれて。悲田垣下
の一分うだ。そもそも先せぬ新賣を覗と。引榻せひて。蔬屋入の酒買若
ふぞく。連歩と聞て前よ進ミ二三人。全々が前後う。隅廻てまづる。
巻とがて揮石と。左右に擰と投著と。筋斗を打て。仰と跳踰つ。ま
むぞくと。競ひ轡を回す。右よ柱左よ當り。或ひ落倒し。踏み下る。も
とせん。勢うへ物とせむ。晚稻の弓も危く。人と鳴くも鄰家へ遠く。
すうれた老の身へ腰え難て。まゆゆを。全々へ母親の側杖を。や聲をと

全从と
たまそ
四五六
さくわ
を見と
懲も

四五六



全从と肩ふ被さのとみの卑りそ
乞四子よ鰐棒一日の怒ふをあらそ
カ這奴等すやうら殺さば。アラ
ヨリハシナリ。ひづれしく。恥のうるる
恥のうるる。恥のうるる。恥のうるる
恥のうるる。恥のうるる。恥のうるる
恥のうるる。恥のうるる。恥のうるる
信とよんそり青縫ふ猛きごろを
撃せり。全从へ今更ふ感居坐ふ
禁あらざり。アラス。母躊躇みぞ四五六。



アラ進退自在とて。敗る者薦
の縁よ跌る。傍よ倒る。死ぬる者
應と乞兒あへ春の山邊よ生歩。早蕨
とうき。繁き。巻と抗て餐ん。浩然
ふ四五六。三貫の簞引揚て。喘まず
身。この形迹よ吐嗟とたゞ。群ふ
乞兒をかくす。集ひ廻ふ。ひづけ
て。もどとぞとと投退且。晚稻をま
タリ。全从も忽地云々。ちよふ城。
足踏みし主のね。四五六。簞引
持ふ。長絆の袖。ざぶ

十一



晚猶とあさり抱き起て。そのまゝ寝や負もれべ。全ふみかへせんをも
る。さう去らんともひしが。四五方死んで。数回歎息し。行
馬の友ゆめゆゑに。おひづみのまほほ達が親切。ごろふ羞る。と多
かり。余あくび宿日あとの恩恵をばつとす。懃これと般んとく。連累
みす。せれまひそ。生て死ぬての跡のとぞんりわきやうでもほ。五箇傳は
まろく。て疾めれ種どつま。と夜を色見等。まねやうに家を記。
倭僕ろび。全女と廻岡んとよる外と。四五六ぞび。かの間向腰拂ぐ
二三へ。地炕の裏へ。う理。まべ茶釜拂びて發とう。座す姿とぞめせぞ。
坐てゆく。手に厭きて。母もあがく。四五方死。ふううて。手一拜。月
立。てゆきの里住捨。家の情うそ。名残は更ふそ。照すや難波の
浦のゆあ。よし。よし。歎きの浪風か。ごく物憂首途る。よし。

遠山の夕霞

却説敗鐵全收も。みづう釀ぢ。殃危。塞翁がくじて。結句
まみだと立玉う。バ仇と。奪う。がとも。ううみんの。ひ。と。うひ。う。四五方
つふまにして。家を捐母と。肩ひ。その夜浪速と。逐電し。大和修。投
也く。役よ。添上郡。今市。の。郡。ハ。実又全ハ。が。苗家。の。地。す。筒井の
城下へ。遠く。い。この。れ。足。を。駐め。怨と。寢。よ。便。宣。よ。と。社。乃
裏。う。深念。う。勝て。今市。の。郡。ふ。つ。而。て。旅。宿。り。と。そ。そ。
う。しく。う。や。の。散屋。を。購。得。て。就。ふ。う。う。に。篠。を。容。と。彼
永樂。三貫文。を。李。殖。と。て。生業。も。る。く。の。外。み。る。ゑ。セ。商。人。も
年。う。暮。と。春。の。つ。と。み。に。慰。ま。れ。て。や。晚。猶。が。老。病。着。ゆ。か。づ。く。

きよりて臥房を掃ふとふすに至る。全みへらず、缺び。
活業は假託つ。日ゆく平城へ交加て。竊あ赤根半を進と窓をと
つども。晚橋をぬく遡して。無見えむことをとまつて。さうつれ
彼老嫗も。その性怜俐のうとば。太和へ來つて。より。全収が
ころ病を精じて。あひくふうち歎けど。如此え定ふるのうれば。
禁ふすもあひざり。時よ天文二十年。春二月の頃とよ
平城より。けれ箇井の館。大和み順傍ぬ。一日赤根半を進。雲
曾太郎。あは昌はどべて。士庶の賞罰を定らる。事の序よ宣ふ
や。汝達豫て。まよどく。近日。承谷山よ。夜多く。妖怪あり。その
氣だ中。う。起りて。半天ふ立の。山鳴。谷震て。草木まれが
駄よ枯鳴る。管林木が訴報。頗るよが。木のうち。云々
昨夕。みづから城櫓み登りて。廻み半谷の方と瞻望を。也。一通の
赤氣天よ冲て。煙の如く霞よ。徧。あられ。色管林木が苦と。う
妄体よあひ。倩物と案を。うて。廻み半谷の方と瞻望を。也。一通の
彼の。本精の。紫紙旗。んと。補の根。うて。瘞。ぬい。つが家の
宝劍。する。風流士の為と。ころ。よあひ。和漢の史傳よ。考。も。が。
千早根神の代。山田大蛇。尾頭。う。生る。劍へ。常。雲を起せ
る。天叢雲と名づけられ。人の代と。きて。日本武尊。草薙と
ゆ。びくえて。樹枝へかけまひ。うて。劍。う。火がえ。生く。忽地。の。樹と
焼。か。熟田の。木と。祝。う。又異朝。晋の時。半牛の。固
忽然と。雲氣の。立。外ると。有。う。時の大臣張莘。と。ふ。の。あ
まを。怪う。博士畠燃。もの。ふ。の。よ。同く。畠燃。大ア。これ。宝劍の

まふそぞれ。り。最上の劍々。土中ふ理ある。あらむ。その
氣の天よ冲とあり。疑ひあらまく。つい。うべ。張華有理とぞ。めそ
疊うて。強て雷旗と豐城の令とぞ。伴の劍遣せ。小雷旗獄金の
基と堀て。一の石函と。圓す。圓す。圓す。圓す。圓す。圓す。圓す。圓す。
あり。名と刺と。龍泉と。ひ。太阿と。命く。この。牛の。間す。
紫氣復え。そぞか。而雷旗。南昌西山の士と。即これと。杖す。
上もあた。宝劍されば。家師へ使と遣す。その。一口と。張華。ふよ。一口と。
留よ。や。あて。おの。まこれと。帶す。と。龍泉。太阿の。二口。干将莫邪
の劍と。文の通ふ。跡と。半と。進が。爲。お説ば。秋迦の。まの
説經よ。似されど。かる。秋漢の。例と。ありふ。よつと。ゆか。こまう。あがら。
先考。明。師の。言。第。信と。家室の大刀と。う。く。深山。は。瘞
まひ。ト。う。今。小玉。二十條。年。遅よ。人間。よ。歟。と。す。されば。彼
大刀。ふ。靈。あり。主と。慕ひ。光と。頭と。されと。疊す。じ。これ
却。その。崇。あ。半と。進。へ。望。と。あ。と。ぐ。件。の。妙。火。も。ち。の。づ。く。滅。す。
覆。と。風流。士。の大。刀。と。う。ま。き。あ。と。ぐ。件。の。妙。火。も。ち。の。づ。く。滅。す。
努。と。解。る。と。あ。と。れ。と。大。息。吹。て。宣。と。赤。根。蠻。松。面。と。あ。り。且。
圓。塔。ゆ。せ。ぼ。う。曾。ち。郎。へ。す。と。進。よ。舍。新。と。小。猿。を。モ。原。殿。の。宣。
そ。う。紙。否。否。一。あ。あ。の。ゆ。り。ひ。と。當。初。先。辰。風。屋。士。の。宝。刀。を。瘞。め。本。山
あ。る。本。精。の。紫。と。壓。あ。い。る。う。れ。尹。弱。少。の。お。ん。と。な。よ。う。ま。世。う。が。ま。れ
ま。ふ。や。あ。ん。ざ。う。ん。つ。と。憚。あ。る。や。と。憚。あ。り。ど。む。り。永。五。の。刀。を。先。君
茶。亭。を。遣。と。ん。と。て。莫。村。と。あ。ま。と。後。京。谷。あ。る。大。榆。樹。を。伐。と。ぼ。し。
う。ぶ。と。の。う。紙。與。う。れ。じ。う。赤。根。宛。不。が。う。か。ま。と。君。の。う。み。の。紫。

ありて。ひ又。子の間快らば。既するあととせ。徑よ。れみ。赤根半を進
ま。厚金二郎太夫。かく。ふとく。やうやく無異。おま車。のち。遂に
紫。す。する。て。先君。忍。猛。き。こ。う。を。相。と。彼。阴阳師。半。は。ふ
往。ひ。あ。二。の。室。刀。風。流。士。風。流。女。と。拭。せ。ん。と。そ。華。流。方。傳。あ。刀。研。
固。樹。く。ス。ア。の。紙。呑。ト。ト。も。い。よ。固。樹。失。て。砾。石。よ。う。中。阳。の。大。刀
す。風。流。士。の。刃。尖。と。學。鍛。え。これ。極。さ。難。度。う。ま。と。捨。別。の。風。流。免。を
か。られ。固。樹。と。そ。が。す。追。く。され。ふ。彼。り。の。い。く。羞。て。や。京。も。是。を
駐。ゆ。ど。妻。す。が。わ。て。逐。電。せ。よ。そ。の。比。風。軍。ゆ。人。を。豫。て。風。流。士
風。流。女。と。二。ロ。う。ぐ。ら。瘞。ん。と。定。め。く。る。る。ま。く。あ。ま。と。先。君。い。と。情。
ま。の。あ。ま。り。風。流。女。の。大。刀。を。箇。め。こ。の。代。と。て。の。外。ふ。瘞。り。べき
り。の。や。ある。と。室。庫。を。索。す。と。ど。そ。れ。よ。や。く。う。り。の。も。は。ひ。難。て
阴阳。師。よ。如。此。く。の。よ。と。告。両。口。の。大。刀。を。残。ア。く。瘞。ん。と。ん。こ。う
み。べ。阴。の。う。え。刃。尖。も。毀。き。され。ば。こ。の。一。口。を。瘞。ん。と。お。よ。う。り。吉。凶。つ。ふ
と。問。せ。り。よ。彼。阴阳。師。答。て。や。う。よ。阴。の。大。マ。の。刃。の。虧。く。お。も。
物。の。性。の。所。為。で。ゆ。る。あ。る。に。う。身。答。ふ。と。阴。の。大。刀。と。箇。め。く。る。
壓。勝。の。柄。も。う。ひ。う。く。う。ん。歟。大。刀。の。眼。前。ゆ。く。と。後。の。蒙。く。い。ま。
か。う。と。か。う。猶。疑。す。と。ふ。や。用。ひ。と。き。ね。が。乞。逃。す。及。べ。ぞ。柱。て。一。刀。と
箇。め。く。と。く。う。べ。塚。の。而。く。コ。ニ。基。の。壳。金。紙。瘞。ま。し。巖。嶋。の。辨。財。天。と。
志。貴。の。昆。沙。門。を。訪。清。り。と。あ。う。と。べ。後の。鍬。尾。と。代。方。よ。う。つ。と。よ。ま。と
と。う。う。う。ん。こ。れ。則。辨。財。天。へ。風。流。女。の。大。刀。ふ。代。昆。沙。門。天。へ。風。流。士。の。
刃。の。毀。て。と。補。よ。の。口。を。あ。と。く。へ。愛。情。の。す。う。う。の。ま。よ。阴。の。大。刀。と
箇。め。く。と。う。う。の。徐。波。女。す。ふ。崇。て。ほ。子。孫。の。患。と。う。ひ。や。努。慎。ま。じ。

と真言憚るをもろい。指がいくに勘しろ。抑件の陰陽師博士の
ゆえか。すく南朝の大臣北國殿の廢流すて。村上対實と対
數世清貢と樂て。角致よ賣ト。僅よ口と齋めどもト笠澤阿子
妙うる。我朝みて泰親晴明漢土みて京房郭璞うんじよ
と。これよ加筆うひらべざりしが惜れ。対實ハ弓矢うりてもや。十年未
あまうゆひる。さつき先君件の勘文を平へ信し。平へ疑ひ遂ア
風流女の大刀を箇で。風流士の大刀をの。采谷よ疊まく本積塚の
東西よ二基の発倉と建立。嚴島の辨才天と。泰貴の毘沙門天を
東西。大刀を箇で。風流士の大刀をの。采谷よ疊まく本積塚の
跡清よひた。えあや。君臣和順。赤根の拳の名す。揚て更子
その家を起。館み福のまうらふにて。植姫のめりけぞ大内殿へ
入興。りへこう。義隆豫て當家の重宝。風流士。風流女の両刀わよと
ゆ呂ゑづき。婚縁の叙となりて。兵顧懇望。あべ先君これと推辞。
さあら風流女の宝刀を。女脅引かれて大内殿へ贈り。あつて
あつて近曾故あくそ件の宝刀を。執權陶晴賢が主君大内殿ふ
まじ賜りて。極意と。付く。さよかと。対實がつひつとを此彼と
ういあつり。が先君情えと。箇う。風流女的一刀も。遂よ當家の小
箇。遠く大内殿の有とある。而外あると。あて。彼嚴島の
毎さん。大内殿の所領ふあり。加旗彼室刀の刃を殿する刀屋同樹も
里裏よ都と。逐電して。今く周防山口の母とうに在と。教告するものいへ
これも又在あづげ。夜森こと。ういのをすのと。物の怪異あむかと
あむか。先晨のひ志も。ほくらひして。件の本精深と。度。宝刀を。うす
うすと。日本の賢て。うふ。齋獻あむか。物は。國家將よ。尊んと

ちる所へ必祐祥あり。國家將よ亡んとする所へ必妖孽あり。著龜ふ
ゆえ。四體ヲ動く。齊王ニの言と。壁密退。二度と。も。う
發塚の。努。ひ。す。み。ひ。て。本谷の両社へ幣帛と進す。又
奥福寺の大安良と延清と禍胎を禳。多力全と願く。と。言祭祇場
道理を述。面を抱く。諫り。諸侯より争はれ。道の是と。を。
その國を失ひ。どく聖語も。よろいある。降松の誠忠の私。か。遠
き。高木様の題。順勝え。未だ度ある。諫を容り。と。英海の如く
せ。ハ。是。雖。判斷。より。と。流を決する。如く。が。この時。生代の餘殃。ま。び
萌。ベ。き。因。果。す。や。あ。り。と。急。地。よ。ま。え。ま。り。童。扈。後。よ。食。く。と。刀。を
取。て。反。うち。サ。一。か。され。曾。太。郎。汝。が。賢。氣。の。婦。女。子。父。ハ。誰。べ。け。且。ど
男。不。す。ひ。か。と。ん。り。誰。か。し。は。與。と。ま。夫。妖。ハ。德。と。勝。を。草。木。元。本
非。情。う。彼。本。谷。の。老。翁。ハ。既。よ。伐。ら。至。て。舊。根。ハ。移。よ。う。つ。で。嘗。て
み。と。と。ほ。ん。よ。や。鬼。魅。因。由。と。う。り。の。あ。り。と。彼。本。よ。お。て。奇。怪。と。う。を
と。も。これ。は。是。領。ま。う。且。武。と。以。國。と。治。む。の。武。德。み。の。え。も。傍。せ。下。され。が
劍。ハ。矛。を。衛。り。人。と。征。一。威。德。と。信。と。神。策。の。一。種。う。よ。陰。陽。師。よ。說。惑
され。家。室。の。大。刀。を。女。に。而。や。それ。被。因。樹。と。や。ん。の。神。有。り。の。と。吹。く。お。よ
先。考。の。が。ん。悟。こ。そ。を。お。う。ん。お。い。ふ。と。う。れ。ば。慢。よ。大。刀。を。埋。ん。と。う。ひ。ま。い
お。う。風。流。士。の。刃。ハ。毀。う。され。被。因。樹。と。や。ん。の。神。有。り。の。と。吹。く。お。よ
任。し。風。流。士。の。刃。ハ。毀。う。宝。刀。の。脅。よ。あ。と。で。何。ぞ。や。か。旗。年。と。経。て。大。内。が。ふ。裏
卒。ま。ひ。う。亦。乞。件。の。大。刀。ど。も。失。ひ。ま。い。本。よ。あ。と。ぐ。年。か。て。又。び。と。も
祥。の。よ。う。わ。が。玉。枕。を。娶。う。て。と。も。難。の。年。を。経。よ。れ。ど。ま。勇。す。と。う。り。の。死



えど。剣。昨夜。其事。よ登りて。木谷山ふ立外る。妙氣を眺望せ。と。腰ふ
帶する。小刀の急拔と脱落して。左の股を劈く。あらずに。怪しき。その
瘡へ。すそれども。刀尖。又著する鮮血を。づくび。拭き。而武傳あく
あり。燒著しるに異るべ。これも又彼亂流士と。う復。復。而武傳あく
衰。戦場より。殺と。前象。あんばよ。かく。もひ。被。欽。拘死
と。ばく。諫め。せよ。ひよやいふと。敷圍て。刀尖。とつた。著つ。今一言。かく
あらざ。曾。太郎。ハ急拔。比干。か。脛。とも。裂。ぐ。筋。す。骨。鴟夷。み。盛。す
べく。とも。危く。え。る。檜。松。の。壁。も。脇。伏。肩。衣。の。腋。り。の。縷。の。縷。を
押。ひ。う。あ。そ。刃。の。下。よ。刃。と。搗。よ。う。肩。諫。ん。と。あ。け。しほ。赤。根。ハ。吐。嗟。と。推。隔。て。
その。刃。と。肩。よ。順。勝。の。極。り。の。う。ひ。る。刃。の。羈。際。楚。と。取。う。凝。著。し
刀。尖。の。鮮。血。と。倍。と。う。觀。つ。左。手。と。衝。て。頭。と。低。肩。見。く。げ。く。う。と。蕩。り。て。
頬。ひ。あ。う。り。よ。許。ま。せ。ま。ベ。モ。や。と。り。ハ。順。勝。面。と。被。げ。は。や。曾。太。郎。り。つ。昔。
ひ。く。諫。も。ち。う。び。き。欲。と。ひ。し。る。に。ま。れ。き。く。予。と。教。る。言。詰。底。答。か。底。
見え。て。悦。著。せ。ろ。よ。そ。願。つ。紀。ハ。何。ゆ。と。仰。と。げ。頭。と。奉。掌。ま。禍。と。禍。ふ。と。れ。
形。代。を。用。て。も。る。と。あ。り。これ。天。鬼。の。餘。波。と。重。九。と。己。の。流。一。難。又。雷。鳴。月。の。
河。社。全。く。女。子。の。戲。と。あ。る。ば。愚。接。と。め。じ。ゆ。今。居。の。感。徳。り。そ。木。谷。内。
塚。を。發。一。宝。刀。と。や。う。復。一。ち。う。ん。よ。の。ぞ。よ。の。ゆ。こ。あ。う。わ。い。ど。こ。の。い。佩。刀。と。
鮮。血。と。汚。す。ん。そ。の。血。の。拭。ひ。と。き。ざ。れ。ど。れ。又。の。快。く。と。だ。う。て。そ。の。乳。佩。刀。と。
本。を。進。よ。ち。う。と。ば。則。則。流。士。の。形。代。と。そ。て。復。る。場。よ。これ。と。想。か。この。ア。セ。リ。

彼宝刀は未だ物の障是すもろく。禍と壓福と殖るトシとぞとみつるをせん。
まへをもどや。とあそぶ。風の柳のす綠のとも愛と竟良医よりて勝てて
順拂り程りうちる力と放ち。微妙もよき。まうぶその力とをみやうとて汝よ
せせん。ゆづくも計よべ。本谷へ程遠くよ長会茂よかくひてけよとやいわ
らす。翌ハ早ヨテ被刃よ赴き。麓の樵夫。官林あれ。居集食塚と並び大刀と
取くと。第ニ三日と過モ。ぐづべ。ごうぬうや。と宣ベ半キ進業示とうち笑え
わきうきえ。青海原の底タゞ。擇り獲がれとある。壽永の乱とよ失う。日の
御座の御歎ひをうば。埋する宝刀と取く。囊の物を取るより易し。かやすふ
ひこうと。旁へあふみ。と意をもじて賜焉。刀と鞘と納と。順拂故衣面
あくられ。さうが吉左太翁をき。退アそ体ひゆとて。牙の眼玉。あうて。簇て
き。まち。そえり。巴脣を郎へ遷し。主の袂と引箋と。すれみせそと振拂ひ。
えくのせと後堂へ席と蹴立て入り。か後方よゆりし小扈從の男童
らをまわす。ホ兩三人。ひと若き。一げふ身と起し。両執袖不然れど。ものく主よ。まくす。
曾太郎ハ今まくに。諫ふ。や。赤根がどう汲う。移て後ろちむらぬ
みちのくの。ちくの。塩竈。まくふ。胸。煙のねどひ。ひまくうくよ。片へ。あら
あべ嘆息あくしづ。半々進ハ襟うれ。締ひ。ひまく。隣松。逃生。ひとひ
みて。まあぐと。の。死。赤根。生。日く。赤根。生。日く。死。ひとひ
轟。まく。端。て。君の。水。と。俵。下邊の。底。意。量。う。が。抑。米。谷。の。木。猪。の。家。へ。一朝
り。まく。一タの。ひ。み。く。な。ま。う。の。監。觸。へ。下邊の。親。する。半六郎。竊。ふ。一。己。の。私利。を
謀り。役。捕。を。代。マ。う。年。日。墓。の。夢。と。覺。し。ま。の。掌。み。ハ。ま。う。家。と。連。累
せられて。養母。を。喪。ひ。又。曲。腰。が。遁。世。も。ま。み。こ。れ。も。名。と。あ。ふ。も。一。ト。ま。び。れ
か。それ。一。ま。わ。う。ら。か。と。更。よ。な。び。く。死。昔。と。今。よ。ア。返。て。役。の。姓。免。も

誰うさんと安ことうむりたれのと棟梁の臣すて大禄と食ひのぐら。
邊へ一言も諫あまうべ。塚を覆き宝刀を取る。あん使とうけめり。嬉し
鳥のえさうるど。居とおりしに邊といひ。御心急地入りうろて物を推道理
小背く。これも本筋の事あそ。條懲主役が皮膚ふくみへ。かくまでふ狂をる
欲。これかへすてや高く。忠孝の名を揚げる。邊さればさんあじ。居よぢ
て。同僚たり。つか私より内裏寄る。滑よどく首あくとも。これうち匿るべうも
あくど。寒よ米谷へ赴きて。塚を覆す玉刀を取て。廢りあるとぞひき。欲
つづく。と小脇をとめ。眼つあつる忠臣の歯。衣冠せぬ言の榮へ。いと
涼く。坐ゆきどよく。もえよだ冷笑い。物へや。塚は生。米谷よ元のよつと。
本筋の崇欽。宝刀の崇欽。神多ばはあすみ。あらび楚とる。室な
常次がそれで眼前。君の命を背くせれ。急切よ罪をうり。てゐる。市ふ
棄すれて。妻子へ歸頭よ飢つて。又本さへ米谷の楠と伐て家を與せを。
ひが為ふも彼舊根と。搖錢樹とぞみの。うごそ。その雲紙懼ん。只鳴くま
主令と否まる。嘗てゆがや。米谷への。しん使仔細。あーと。圓答もあくど。
かうじ立と立と果ぞ。刀の瑞應。うきて。禪の初と権也と押面漢の王莽ハ
士よ。す。おの田氏ハ比周。そ。是彼國家を奪ひよ至す。右臣と。ひの外奸。伎
東林の事。進ともあくばて。て。え。年。永。を。く。れ。う。そ。う。れ。君の。勢。あ
を。を。殺す。通家の好ひ私。み。の。伝人を。撃。う。て。禪の根と。斷。く。そ。う。連。そ
と。敷。園。あ。く。牙。を。ひ。じ。て。接。が。る。刃。ふ。そ。矢。ひ。と。回。扇。を。ひ。て。推。そ。め。卑。り
ま。ふ。み。い。と。わ。う。この。期。よ。あ。び。て。何。ぞ。吹。ん。腹。き。腹。下。そ。刀。を。う。け。よ。と
め。く。坐。ら。ま。石。の。臂。と。沈。ほ。て。勢。い。強。く。又。接。が。る。瑞。と。底。で。揃。く。金。そ。オ。と。突。薯。て。破。と
さ。ざ。坐。一。ひ。身。ひ。も。せ。ば。今。の。情。を。と。す。も。か。の。君。の。馬。か。金。金。金。を。い。づ。く。に。

邊とこれと同士聲せば。其とちのとつべをや。日本へ物よ堪忍が溫和乃
翁を浴一昼夜。一日の憤ふ事の虚実と同も定め。そがを聲をせす。
そこれも本精の出よこそ。さうそあ刃を納め。と騒どはぬ大丈夫取る
瑞をうのや放せ。曾志郎へ是れ公放さば。刀を衝て膝に之處。うのトハ
表裏小糸。君の為少へ家を忘と。今も経て惜きだ。ところどそこの
諫言のまゝ。日未ハ物よ忍がとも。今これとゆ忍べく。何ゆう忍さん
主家の安危え。卷ふあり。アツフ不理あく。僅よ令と助くべ。とづらせら
あじ。半々進ひ扇とあげて。奇ひと高と推禁め。おもひ。後方。紙門と
ゆき。まよ。よ。松ね。事成就も。妻ふゆふも。も。とちひ定めて
少じ。脚邊の恨すか。み。の方すとうちあけん。と未期の一句とも。ゆ
さういか。後と。アツフ曾太郎肩根と。如。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。
おふざむ。額よ額。と。寄され。半々進声とひを。悔く。やく。ゆく。ゆく。
あぐら。木谷山。ある楠と伐。し。う。禄と。し。又が幸ひへ。幸ひ。幸ひ。
沈淪。深泥。と。三勝。と。飴湯。と。苦。と。當主。と。一旦。伝人。あ。賺。されて。沈樂
を。入。と。又子。の間。快。と。だ。剣。又と。姑の枉。と。物の崇。み。ふ。見。の。不側。と
夜。争。て。長臣。の。列。か。れ。半百。の。齡。ふ。至。る。も。居。と。又。の。賜。され。が。この。の
事。ある。と。も。寧。不忠。を。存。と。ざ。ま。る。と。の。比。村。上。駄。室。と。勘。文。の。首。と
住。せ。れ。え。君。遂。と。風。流。士。の。宝。刀。と。り。つ。て。本。精。塚。と。築。龕。あ。ひ。と。彼
崇。禱。と。君。臣。と。異。を。浴。と。松。と。金。刀。二。口。を。埋。ん。と。と。情。を。せ。す。と。あ。わ。
お。ま。い。が。れ。と。ま。る。と。の。ち。お。ま。ち。か。と。ま。る。と。の。ち。お。ま。ち。か。
柱。て。風。流。女。の大。刀。と。あ。め。それ。と。が。後。よ。大。内。家。替。引。ま。進。らい。ゆ。ひ。つ。
是。う。先。と。祝。ま。が。階。よ。ん。よ。く。と。あ。つ。続。井。殿。懇。よ。陰。陽。の。天。刀。と。う。ら。そ。
そ。二。刀。を。埋。り。べ。物。の。怪。全。く。薄。と。ど。男。女。の。間。よ。不。幸。あ。く。か。旗。残。く。

尚の流女あひりの太刀たちも又またその主お主よ禍まことにをす。豫断絕よだんぜつをすと。虎とらを画ゑて
猫ねこよ類たぐいを。続井坂つづかざかの苔牆かづかの塗灰ぬりはい後のちよきとあうる。ある者ものと呼よさうと
あらう。まみ。彼かれが実じつ身みをとて。經へてこれこれを告ごす人ひとあり。此この彼かれ名なあをとす。彼かれ風流女ふうりうじょの
不ふもともとをよしとよしとる。
内殿長臣うちでんちやうしん晴賢けいげんすりて。今いま陶とうが家いえす。彼かれ宝刀ほうとうを浴あつつ。新しん年ねう。晴賢けいげんが驕奢けうしや日ひあよほして。威勢いせ主君しゆきんと凌さわる。陶とうが滅めつ亡むつす。近ちかまよあらん。
未然まじんと察させ。殺さつ夷いへ現あらわト。英えいの聖せいなる。也や。也やが是これを物憂ものう。近ちか昔きつ不谷ふだにお
妖元ようげん立たつ升のぼ。其そのと背そむんと。下さく。不ふ君きんへ。あり。を。も。薄うす瘻うずきを負うけひき。そ。の血け刀尖とうせん
よ凝こご著きる。と。も。す。う。と。ぬ。祥よしう。ね。誰だれ。これ。を。階はし。下さ。傳つた。よ。の。う。あ。ぐ。ら。
日ひまの。言ことと。容ゆめ。よ。又また。君きん俄頃おののき。暮くろしく。宿老しゆろうの。厚こよ。遠とお。二に。刀と。小こ。斬きも
乗のづき。に。氣きを。と。起おき。あ。よ。余よを。む。と。あ。あ。ね。ど。も。君きん。不順ふじゆを
本ほん猪いのしの。事こと。よ。く。ち。そ。れ。と。德とく。よ。う。ま。血け。よ。潔きよ。よ。く。佩は。刀と。よ。う。し。も。く。と
ゆ。ひ。君きんよ。あ。ぐ。と。禍まことに。半はんを。進すす。身みの。肩かた。ひ。て。未み卒そく。山さん。う。す。大だい。猪いのし。城じゆ。元もと。
の。ち。ん。佩は。刀と。り。そ。腹はら。を。切き。ぶ。下さ。か。彼かれ。捕つか。と。代か。る。又また。が。逃のが。れ。よ。う
あ。て。こ。う。君きん。わ。お。ひ。く。を。あ。り。よ。本ほん猪いのしの。條じょう。急せき。消き。滅めつ。一いつ。主しゆ。家いえ。急せき。逃のが。卷まき。山さん。
を。そ。れ。不ふ。こ。そ。を。か。ぐ。け。と。か。ん。と。ひ。定さだ。り。ど。も。や。も。洩のぞ。き。そ。こ。う。君きん。乃の。
か。下さ。く。う。の。ア。カ。ヤ。と。一いつ。じ。だ。う。ゆ。ち。い。隔はな。ぬ。け。透とお。よ。ま。う。ら。あ。け。と。志。び。の
物もの。を。か。く。う。る。この。と。う。け。あ。り。し。て。ど。あ。よ。う。に。此度しどうの。天あま。變かわ。地じ。女めの。と。云。基き。
一ひとつ。貞じやう。より。と。只ただ。顧かの。よ。年とし。來くわ。信しん。下さ。す。和わ。途と。の。里さと。あ。ハ。櫻さくら。や。又。斧のぎ。父ちち。よ
勤きん。請うけ。う。辯べん。財ざい。天あま。女めの。鬼き。山さん。門もん。夫おとこ。と。祿ろく。外ほか。代か。る。う。じ。と。ひ。そ。め。死死。か。臣しんの
涙なみだ。胸むね。よ。健けん。う。國くに。太お郎ろう。ハ。今いま。ま。に。づ。ひ。つ。と。の。恥はず。と。か。あ。ぐ。と。と
み。ぐ。ら。人の。邪あく。よ。常つね。り。け。と。が。ひ。足あし。と。底そこ。疑うそ。と。侵しん。者もの。よ。不正ふせい。よ。と
罵ののり。と。ま。が。面おもて。ほ。君きんの。意い。あ。つ。れ。ゆ。惜惜。む。令めぐら。よ。あ。と。ざ。と。方かた。席せき。り。と。が

こうみど。而邊より先と踰え。天その孫也と憐て。國の難を攘へ
め。彼周公の金縢の書。よそびに邊が馬かねんと今古有ぐれ
続井の家の柱石と承父の山の楠と。昔よ折ぶ聖なり。誰とどうふく居と
い。佐々木の櫟社へ近石も。今くよしてとことよ。壽と。曾太郎が。之をぞ
人ひづべき。どひやくとあくをあく。うけゆくと慰う。
訪解と。赤根へうちを起次から居の終よ隠て。言候し。ゆ私門に。及ばざ。
コが妻撃へ。邊の姉と妹なり。コがすゞらへ。邊の外住なり。何と
あくひ遺を。ごき。よのれ。脚言人や。呻く。誘ま。こそつを。せざ。曾太郎
を。かく嗟嘆。一つ。立と。かがりと。るふみぞ。ゆくと。別きの苔石。滴。漬。と
ヨリ。ふ箇移。て。こうよ。達。う。屠牛のあみの末。過て。漏刻。寄く
申の時。枝。よ。蘿。う。槐。の間。う。ひく。障子の不そぞれ。うら。篠。う。つ
後。子。う。先。よ。立。そ。ぞ。退。出。り。正。ふ。乞。か。ら。ド。と。か。移。く。ち。り。ぎ
あ。づ。き。引。う。た。う。よ。つ。乞。を。ぞ。と。ぞ。む。と。踊。る。こ。う。あ。う。や。か。に。移。ふ
赤根半。え。進。る。曾太郎。よ。別。ま。う。宿所。よ。歸。り。こそ。三。勝。ま。せ。あ。よ
對。ひ。俄。頃。の。仰。と。熏。よ。れ。バ。翌。ハ。未。時。よ。起。り。て。本。苦。山。へ。赴。く。よ。と。吹。え
あ。ま。ほ。き。三。勝。ハ。熟。と。良。人の。顔。そ。う。ら。瞻。ア。あ。ん。く。れ。た。婦。女。子。の。愚。癡
み。る。や。も。え。う。ぞ。け。れ。ど。仰。と。年。ん。顔。色。の。あ。く。こ。え。よ。セ。ゆ。く。と。そ。ひ。か。と。あ
は。き。あれ。彼。承。谷。の。物。の。怪。ハ。阿。翁。の。時。よ。掌。紙。釀。せ。縁。故。ハ。す。ぐ。も。う。ま。
豫。よ。う。は。ゆ。て。忌。憚。と。傳。わ。の。と。人。も。と。そ。考。う。な。この。先。使。と。愚。癡。
承。を。元。使。と。だ。あ。ど。そ。や。推。肆。あ。が。る。と。肩。根。う。算。つ。傳。ま。べ。す。七。も。又
又。と。殊。て。母。云。の。宣。入。不。理。と。そ。を。考。え。シ。勝。母。の。里。す。東。を。ウ。朝。歌。の。布。に
杖。と。蔓。ぞ。名。の。忌。に。ま。し。う。君。子。ハ。忌。ア。況。つ。が。家。よ。掌。死。ラ。セ。し。本。精。塚。と

幾人。物候うやうびや。とつせものぞすと進ひ。町とうら笑ひ。武士の
家はけり。百万騎の敵陣へも駆入んひ。常く君の爲あひて火を硝ひ。
どうのとれ推辞うのんや。怪えて怪さればその怪教どもつ。母も
とあれやもあれ。また又が躊躇を端でさきとつと女に。必人みなせれ。
と取もの移が神もと。貌の底をさるよ。貌よ羞ろむ。すせへ母貌と目を
ほり。然れど。かくて己べなよあらね。二猪へやう。坐松平糸許人ときじて。
記行於深谷のうせき。すせり多考よ。私車放妻あんと。そのいどよ分付て。
主人が行路態の准体あどどる經よ。園花平糸曾太郎ホ。こよ箇奈て儕別を
きせう。すく曾太郎の。すく追が死を究し。孤女のかきをもうてけまぐ。
ひの申葬にて樂ねど。かくすでらひ定めると。これくそをの妻子にもじて。
すく嘆せよ。かくすもあらかば。すく進ひみづくよ。今すうだの
曾殘と云々。曾太郎平糸園花お紙画めて。通宵酒りうねり。難鳴曉を
告比よ。かくして打粉つ。箇井令綱の陣羽織よ。勝村良子の野袴と襷。
筑紫源治が打つてくる。二八えすの腰刀よ。恩湯のあん佩刀と夾副。
家よひきく仕る。私卒丹三ホ。八九人の奴隸をおて。餘を持。殯棺を
擔。轎ふを昇つて立せざ。二猪園花うべさま。二人の子ども棺ねむ。
ちよかひるひと人を送りて。こねやこの世の別まと。おもあくねゆ立つ。
濡らぬかうド袂す。 (村田)



